書評

『大学で学ぶ沖縄の歴史』（吉川弘文館、2023）
－「現代」の構成と記述を中心に－

鳥山　淳

本書の構成について

本書は、「琉球沖縄のたどってきた「あゆみ」（通史）を、先史・古代から現在の沖縄社会までたどりながら学べるテキスト」（ プロローグ ⅲ頁）として編集・発刊されたものであり、そのような「入門的なテキスト」が乏しいため、「大学の授業で用いるテキストにとどまらず、多くの人々に届けたい」というねらいも込められている（同ⅳ頁）。たしかに、先史・古代から現代までをカバーした類書は限られており、しかもその発刊から一定の年数が経過しているため、本書に対する社会的なニーズは確実に存在すると思われる。

本書の企画編集の方針が述べられているのは「プロローグ」のみであるが、そこには構成や章立てに関する説明は見当たらない。そのためまずは、本書において設定されている時代区分とそれぞれの記述の分量（および比率）を確認し、それを類書と比較することによって、本書の特徴を確認することにしたい。

主な比較の対象とするのは、2004年に発刊された『県史47 沖縄県の歴史』（山川出版社）である。本書において設定されている 5 つの時代区分に対応するように『県史47 沖縄県の歴史』の各章を振り分けて、それぞれの頁数と比率を示したのが次頁の表である。

この表に記された比率は、カウントした頁数の合計の中で各時代が占める比率である（目次・索引・年表などの頁数は含まずに計算している）。また、本書では沖縄戦の記述が「現代」に含まれているため、『県史47 沖縄県の歴史』の 9 章における沖縄戦の節を「現代」の頁数としてカウントするように調整している。なお、両書における 1 頁あたりの文字数はほぼ同じなので、頁数によって記述の分量（文字数）を比較することも可能である。

ここから確認できる最も明確な差異は、『県史47 沖縄県の歴史』では「近代」の比率が最も高く「現代」の比率が最低であるのに対して、本書においては、やはり「近代」が高い比率となっているが、それをさらに上回る比率で「現代」の記述がなされているという点である。つまり本書は、「近代」と「現代」を重視し、とりわけ「現代」の記述に力を入れているテキストブックであると言えよう。

さらに、近現代のみをカバーしている『県民百年史47 沖縄県の百年』（山川出版社、2005年）と比較すると、本書においては近代と現代の頁数の比率（合計を100として算出）は近代45に対

表　時代区分ごとの頁数と比率

『大学で学ぶ沖縄の歴史』		『県史47 沖縄県の歴史』	
Ⅰ 先史・古代 旧石器時代／沖縄貝塚文化／宮古・八重山の先史文化／律令国家と南島	30頁 （13.6%）	1章 琉球文化の古層 2章 大型グスクの時代	45頁 （14.8%）
Ⅱ 古琉球 グスク時代のはじまり／島々に築城された城（グスク）／琉球王国の成立過程／第二尚氏政権による国内統治と対外貿易／琉球列島のグスクと集落	37頁 （16.8%）	3章 古琉球王国の王統 4章 海外交易と琉球	65頁 （21.3%）
Ⅲ 近世琉球 島津氏の琉球侵攻／中琉日関係のなかの琉球国／首里王府と士族層／琉球社会と特産物・日本産品・中国商品	32頁 （14.5%）	5章 東アジアの変動と琉球 6章 琉球における身分制社会の成立	82頁 （26.9%）
Ⅳ 近代 異国船の来航／近代国家の成立と「琉球処分」／沖縄統治の変遷と旧慣温存／地域・学校・軍隊／群島からみた沖縄移民／近代沖縄における「風土病」の歴史／国家総動員体制から沖縄戦へ	54頁 （24.5%）	7章 王国末期の社会と異国船の来航 8章 琉球国から沖縄県へ 9章 近代化・文明化・ヤマト化の諸相	88頁 （28.9%）
Ⅴ 現代 沖縄戦／占領と離散／世界史のなかの沖縄／「高度経済成長」と住民生活／復帰と反復帰／米軍基地と自衛隊／開発と観光／現代沖縄社会の諸相	67頁 （30.4%）	10章 繰り返される世替わり	25頁 （8.2%）

して現代55であるが、『県民百年史47 沖縄県の百年』においては近代 68 に対して現代32である（ここでも沖縄戦に関する記述は「現代」に含めて算出した）。この比較からも、本書における「現代」の比重の高さが確認できる。ここで比較した 2 つの図書の発刊から20年近い時間が経過したことに伴って、「現代」として記述される期間が長くなっている点を考慮しても、本書が「現代」を重視して構成されているという特徴は明らかである。

ただし、このように重視されている「Ⅴ現代」（162 頁以降）において、「現代」を捉える本書の視点をうかがわせるような章の配置や記述内容は見当たらない。先ほど比較対象とした 2 つの図書をはじめとして、「近代」の結末として沖縄戦を配置することが通例となってきたことを考えると、沖縄戦から「現代」の記述を開始する本書の構成は、それ自体がメッセージ性を有しているとも言えるのであり、その視点が積極的に提示されていないことは「もったいない」と思うのである。

「現代」の特徴と疑問点

本書の記述スタイルは、時系列的・網羅的な通史とは異なり、「書き手の多様性を生かしたテーマ的な叙述」（プロローグⅴ頁）を特徴としている。「現代」に関しては、配置された各章のテーマから明確に見えてくるのは、軍事基地と住民生活との関係である。対日戦争遂行のための基地建設、米国統治下における基地の維持と拡張、基地経済の定着から脱却への試み、米軍機事故への抗議と基地撤去の要求、施政権返還後の基地固定化、90 年代以降の新基地建設問題といったテーマの連なりによって、本書における「現代」は縁取られている。先述のように、既刊の類書が沖縄戦終結後の時代に割いた紙幅は限られているため、本書のような詳細な記述は存在しない。それらと比較したときに、「現代」を理解するためのテーマ（章）を多数配置した本書の意義は明確である。

ただしその各テーマを通読すると、気がかりな特徴も見えてくる。それは端的に言えば、統治の仕組みに対する記述が極端に少ないことであり、あるいは言い方を換えるなら、「世替わり」を説明しようとする視点が弱いことである。その象徴的な現れとしては、USCAR（琉球列島米国民政府）・琉球政府などの統治機構に関する言及が存在せず、高等弁務官についてはその意味も説明されていない。この点は、先述の類書が時代状況の前提として真っ先に言及していることと著しい対照を成しているのだが、それが本書の企画編集の意図によるものかどうかは第三者には判断がつかない。

先に指摘した軍事基地と住民生活との関係について言えば、軍事基地の存在やその影響を可視化するという点で本書は充実した内容を有しているが、他方では、それらの現象を生み出した統治の問題を読者に伝えることができるのだろうかという疑問がわいてくる。この点は、テーマ（章）の配置を見ながら感じる違和感でもあり、例えば「5 復帰と反復帰」の後に続く「6

米軍基地と自衛隊」において、ようやく天皇メッセージ（1947 年）や対日講和条約（1951年）が説明されるという構成は、あまりにも「ちぐはぐ」なように思える。さらに言えば、施政権返還後の米軍基地を維持するために日本政府が繰り出した施策が説明されていない（開発政策の記述しか見当たらない）ことも、気がかりである。

なお補足的に本書の「近代」に言及すると、冒頭で「琉球処分」という「世替わり」について世界史的な背景と統治の様相を説明し、その後に複数の視点に基づくテーマが続く構成には説得力があり、違和感なく読み進められるものであった。もともと沖縄近代史に関しては、資料的な制約ゆえに時系列的・網羅的な通史の提示に限界があるため、本書の「近代」が提示した構成と記述のスタイルは、継続的に参照されるべき重要な事例になるのではないかと思われる。